

国際協力

JICA 駒ヶ根

1908年、第1回日本人集団移住者を乗せて出航した移民船「笠戸丸」は、約2ヶ月間におよぶ航海を経てブラジルのサントス港に入港しました。それから100年。本号では「日本人ブラジル移住100周年」特集を組み、様々なブラジルとの関りを紹介します。

ブラジル日系人演劇「虹の子」好演!!

“国や文化が違っても人の心は同じ”

6月15日に「ブラジル移住100周年記念イベントinいいだ」が飯田市の飯田人形劇場で行われ、飯田ブラジル日系人スポーツ文化協会メンバーによるオリジナル演劇「虹色の子」が上演されました。



▲出演者全員で“虹色”のハンカチを振り、エンディングを飾った

現在、飯田市に在住する外国人で最も人口が多いのはブラジル人です。地球儀では日本の反対側にある遠い国ブラジル・・・100年前そんなブラジルに移住した日本人がたくさんいたことを知っていますか？ どうして海を渡ったのか？ 移住してからの生活は？ 再び海を渡った彼らの現在は何様な背景を持った日系ブラジル

人が抱えている思いを演劇を通して社会に伝えたい。そんな気持ちから、この演劇はスタートしました。

昨年10月、演劇の経験はないけれど伝えたい思いはある、というメンバー達。どうしたら・・・と悩んでいるとき、偶然にもある会議で演劇のリーダー長沼氏とJICA駒ヶ根所長が出会い、それをきっかけに、ニカラグアの元協力隊員で演劇指導経験のある古畑美樹さんの協力を得て、演劇「虹色の子」は活動を始めました。

練習はメンバーが休みの日曜日。なかなか皆が揃わず先が見えないときもありましたが、徐々に皆の気持ちがひとつになり15日の本番を迎えることができました。

発表後、来日して7年目のブラジル人メンバーは「私達はブラジル人で、日本人で、そして人間だよ。違いがあってもいいんじゃないかなあ。ときどき仕事でいやな思いをするけど・・・今日は皆に伝えられてうれしかった。伝わったよね」と公演後、笑顔で語ってくれました。日本人メンバーは、「以前はブラジル人には良いイメージがなかったけど、今回一緒に劇を作り、明るさや優しさユーモにあふれる彼らが大好きになりました。交流することって大切ですね」と語っていました。今回の演劇を通して、「お互いに歩み寄り心」「お互いを尊重し理解する心」「交流」「出会い」の大切さを改めて感じた演劇会でした。

特集

日本人ブラジル移住100周年

TOPICS

ブラジル移住100周年記念イベント	P1
ブラジルでの教師海外研修	P2
日本とブラジルと私	P2
JICAブラジルからの便り	P3
ブラジル人学校の施設見学	P3
お国自慢レシピ	P4
日伯100周年記念イベント一覧	P4
訓練所の1日	P4
中学生体験入隊を終えて	P5
元気にやっとなるけ？	P5
長野県出身ボランティア奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
訓練所こぼれ話	P7
お知らせ	P8

駒ヶ根訓練所（JICA駒ヶ根）の地域連携事業

訓練所は、JICAボランティア派遣前訓練・研修の他に、県や自治体・学校等と連携した開発教育・国際理解教育の実践支援についても、随時ご相談を受付けております。

日伯100周年記念イベント

日本人移住100周年を記念して、様々なイベントの開催を企画中です。日程の詳細や、追加イベントは順次ホームページでご案内しますので、奮ってご参加ください。ブラジルが身近になる一年にしましょう!

- ブラジル日本移民100周年記念 長野フェスティバル 8月10日(長野市)
- ブラジル理解講座(仮称) 教員ネットワーク 主催
- 横浜移住館への日帰りバスツアー

ブラジルでの教師海外研修と その実践レポート

「教師海外研修」は、JICAが国際理解教育および開発教育に興味のある学校の教員を、約10日間の日程で開発途上国に派遣する事業です。昨年度、このプログラムでブラジルを訪れた北原正治教諭に、現地での様子と日本での実践について報告していただきました。

きたはら まさはる
北原 正治 さん(箕輪町立箕輪中部小学校 教諭)

今年2008年は、日本人のブラジル移住100周年である。初期のブラジル移住者の労苦を描いた北杜夫氏の小説「輝ける蒼き空の下で」を読むと、胸がつまる。そして、今ブラジルの日系人は約150万人を数え、確固たる地位を築いている。その内の約31万人が日本へ出稼ぎに来ているという。

昨年7月、JICAの「教師海外研修」で、ブラジルを訪ねた。サンパウロ州では、300以上の州立校で「日本人のブラジル移民100周年」に関わった催しが行われていた。ある州立校で日本をテーマにした飾りつけや発表を見て、固有の文化というものの大切さと、一つのものに取り組む時の学校の一体感を感じた。私達も「ふるさと」の歌を日本語とポルトガル語で歌い好評だった。

帰国後、箕輪中部小の職員研修で、その体験を発表した。本校の35名(全児童数の5%)の外国籍児童の歴史的、文化的、社会的背景を先生方に理解してもらい、指導に役立てようと考えた。かつて日本の国策としてブラジル移



▲百周年記念の行事をしていたサンパウロ州立学校

住を奨励し、今また日本国の国策として“デカセギ”を受け入れた。ブラジルの経済は好調だが失業率も高く、日本への定住化が進んでいる。本校の外国籍児童の家庭の多くは、定住する希望を持っている。日系人といっても、考え方や行動様式は日本人とは異なっている。異文化の中で格闘している人々に温かい対応をすることは、国際貢献であり日本の印象を良くすることにもつながる。このような内容を話し、現地の写真を見てもらった。そして、「同じ時代と社会を生きる仲間として、『愛』を合い言葉にして共に生きていきたい」という言葉でまとめた。参加者からは、「今まで知らなかったブラジル籍の子ども達の置かれている状況が分かって良かった」という感想をいただいた。

日本とブラジルと私

中南米の日系人社会に対して、その一層の発展を図るために、派遣されるのが日系社会青年/シニアボランティア。ブラジルで日本語教師として活動していた岡宮美樹さんに、ご自身とブラジルのつながりや、思いを綴っていただきました。

日系青年ボランティア20回生 おかみや みき
岡宮 美樹 さん(旧姓 成澤/日本語教師)

地球儀で探すとちょうど日本の反対側に位置しているブラジル。日本でのブラジルのイメージといえば、「カーニバル」「アマゾン」「サッカー」ですね。そして、最近では多くのブラジルの方が日本へ働きに来ています。「遠くて近い存在の国」になりつつあるブラジルです。そんな存在のブラジルは今年で日本移民100周年の節目の年です。

私とブラジルの出会い、そして生活は衝撃的なものでした。学生時代、教育実習へ行った私の母校は日系ブラジル人の生徒が多く在籍していた学校でした。彼らは慣れない日本の習慣や日本語での授業に一生懸命でした。そうした彼らの姿を目の当たりにし、自分が外国人として海外に住むという体験を通し、彼らのココロも理解したいと感じたのでした。

その後2005年から2年間、日系社会青年ボランティアとして、ブラジルのパラナ州で活動してきました。ブラジルはサンパウロ州とパラナ州を中心に多くの日系コロニアがあり、日本の文化や日本語を大事に守り続けています。1908年にブラジルへの移住が開始され、世界最大の日系社会を誇り、約150万人の日系人が暮らしています。

遠く離れたブラジルの地で、「日本人」としての誇りを持ち、日本の文化や言葉が脈々と受け継がれている現実を見て、とても感激したことが今でも印象に残っています。それでも、時代の流れとともに、日系三世、四世の子どもたちは日本語を外国語として学んでいます。私はこうした子どもたちが通う日本語学校で教えていました。慣れない地での生活というのは、私にとって簡単なことではありませんでした。それでも、周囲の人々の優しさや寛容さに支えられて活動できました。帰国した今、ブラジルへの恩返しが少しでもできるよう、誰もが住みやすい地域づくりに貢献していきたいと考えています。

JICAブラジルからの便り

ブラジルにおける「日本」はどのような存在なのでしょう。JICAブラジル事務所に勤務している長野県出身の後藤菜穂さんのレポートです。

JICAブラジル事務所 ^{ごとう} 後藤 ^{なほ} 菜穂 職員（長野市出身）

みなさん、こんにちは。赴任して1年以上が経ちました。こちらに来て日本人移住者とその子孫である「日系人」が、ブラジル社会の中で非常に高い評価を得ているということに大変感銘を受けています。農業発展への貢献に始まり、今や最高裁判所判事、国会議員、空軍総司令官、大学教授、医師、弁護士などに日系人が名を連ねます。「信頼できる人・勤勉」は、ブラジルで定着している日本人像です。

また、非日系のブラジル人も日本に対し並々ならぬ関心を持っているということにも驚かされました。国内の至る所で「日本祭」が開催され、日本文化（生け花からアニメまで）や日本食を求める人で大盛況です。地球の裏側で、こんなにも日本を熱く想っている国があるとは住んでみるまで全く想像できませんでした。これらは100年かけて地道に誠実に勉強や労働に励んできた日系の皆さんに対する評価です。

ブラジルは今や世界第10位の経済規模を有しており、鉄鉱石、石油など資源に恵まれ、農業生産のポテンシャルも高く、鶏肉、オレンジ、コーヒーなどの世界最大輸出国です。しかも環境破壊せずにまだ食糧増産可能だといわれています。また、世界の熱帯雨林の半分近くを有しており、地球の酸素の約30%を生んでいるともいわれています。世界中で資源・食糧の確保、気候変動に対応するための環境保全が喫緊の課題となっている現在、ブラジルは、日本にとってもはや単なる援助対象国ではなく、環境保全を始めとし第3国や他地域、ひいては世界全体が裨益するような事業を積極的に進める協働パートナーとなりつつあります。

ブラジルと日本の関係についてまだまだ書きたいことはありますが、紙面の関係上このあたりで終わりにします。この続きは、ぜひブラジル人のご近所さんに聞いていただくか、JICAブラジル事務所までお問合せください！



▲サンパウロ州軍警察：会議の様子。
（日本の「交番」の経験と技術を活かし、治安改善のための支援を行っています。）



▲ブラジリアで開催された日本祭に出品していた「忍者美術館」。
今や日本文化は非日系のブラジル人の間でも注目の的。

ブラジル人学校の生徒による「カポエイラ&サンバ」の発表

6月18日に、伊那市西春近にあるブラジル人学校の生徒さんが、当訓練所を訪れ、集まった市民を前に、ブラジル伝統の武術カポエイラと舞踏サンバを披露しました。



▲地面に手をついて蹴ったり、逆立ちをしたり、アクロバティックな独特の動きを持つカポエイラ

このイベントは、ブラジル人学校「コレージョ・デザフィオ」の飯島ヨシムネ校長の提案で、「生徒たちが普段練習を重ねているブラジルの文化や伝統をたくさんの人に見てもらいたい」という思いを実現させたものです。発表してくれたのは、小学2年生から、高校1年生までの36名の皆さん。飯島校長は普段から「生徒ができるだけ地域と関わられるように」と、様々な施設を訪問しており、昨年から当訓練所とも交流が始まりました。

この日、披露してくれたカポエイラは、16世紀以来アフリカからブラジルへ奴隷として連れてこられた黒人たちが、主人の看守にばれないように修練するために編み出した護身術だといわれています。民族楽器を使った演奏と、手拍子に合わせ、足蹴りなどを交えながらステップを繰り返す演技で、その軽快さに歓声が上がりました。サンバの発表では、明るい音楽に合わせ、ブラジルの陽気な雰囲気を作り出してくれました。

見学に訪れた市民の方や、報道ニュースを見た方から「ぜひ、同校と交流をしたい」という申し込みがあり、これからの絆の深まりが楽しみなところです。飯島校長は、「デザフィオが『ブラジル人のいくところ』ではなく、だれでも集える場所になったらうれしい」と話しています。同じ地で、共に暮らすブラジルの方々と、今後ますます国籍を超えた交流が盛んになっていくといいですね。

お国自慢レシピ

今回はブラジルで日系社会青年ボランティアをしていたJICA駒ヶ根スタッフが、とびっきりおいしくて簡単なブラジル料理を紹介します。

ブラジル料理 PASTAL (パステル)

パステルは、誕生日、卒業式などのお祝い事には欠かせないポピュラーなスナックです。大きいものならそれだけお腹いっぱいになります。写真は街の人気店の巨大パステル。とっても簡単なので、家庭でもよく作られています。



ブラジル風揚げ餃子パステル

材料 (20個分)

- 牛挽肉 300g
- 玉ねぎ 中1個
- にんにく 2かけ
- コンソメスープの素 1個
- パステルの皮 (餃子・春巻きの皮、パイ生地
で代用しても可) 200g (40枚)
- 塩・揚げ油 適宜
- 油 大さじ2
- 水 約100ml (半カップ)

レシピの主は 誰やら？

さいかわ みか
齊川 美香 スタッフ
(ブラジル派遣・日本語教師)
現在：JICA駒ヶ根市民参加担当

—作り方—

1. 鍋を中火で熱し、大さじ2杯の油を入れる。
2. みじん切りにしたにんにくと玉ねぎを加え、玉ねぎが透明になるまで弱火で炒める。
3. 少量の水で溶いたコンソメを加えて混ぜ、挽肉を加えてさらに炒める。
4. ざっと火が通ったら、約100mlの水を加えて混ぜ、蓋をして煮る。
5. 塩味を整えて火からおろす。
6. パステルの皮にやや少なめに具を入れ、フォークの背を使って生地を閉じる。
7. 十分な油を中火で熱し、焦げないように気をつけながら、すばやく揚げる。

私は日系社会青年ボランティアの日本語教師としてブラジルへ派遣されました。生徒達は5歳～65歳 日系人～ブラジル人まで日本語を学びたい人



▲日本語教室の生徒たちと齊川スタッフ (手前中央)

なら誰でも歓迎というアットホームな学校でした。みんな日本のアニメやアーティストが大好き！私より詳しいのには驚きました。特にワンピースや、ナルト、浜崎あゆみに夢中な生徒がたくさんいましたよ。

訓練所こぼれ話 No.7

むらた みちこ
村田 道子主任 (東京ビジネスサービス 食堂主任)

駒ヶ根訓練所に勤め始めて、早XX年が経とうとしています。勤め始めのころ、社会人になりたてで、出会う候補生の方たちの必死さと夢と希望に満ちたまなざしが、とても印象的でした。食事に来られるときのちょっとしたおしゃべりの中、感心させられたりと、ここを旅立たれる時は、あまりに皆さんとの別れが寂しく、涙で見送ったことを思い出します。しかし、月日が経って、慣れというもの恐ろしいもので、仕事に追われていくうちに、出会いの感動も少しずつ薄れていきました。

ところが最近、私達の仕事の原点というのでしょうか、食べていただいて「おいしかった！」の一言のうれしさをあらためて感じさせてくれた候補者の方たちにまた出会いました。「毎日、毎日、ありがとうございます。これからもがんばってくださいね」。そんな言葉を素敵な寄せ書きに残していつてくれたのです。私たちの方こそ、感謝の言葉を送りたい！そんな気持ちでした。そして、そんな人達こそ、任地での仕事に感謝され、すてきな足跡を残してこられることでしょう。



▲候補者の夕食を準備中の村田さん (左端)

第19回青年海外協力隊中学生体験入隊を終えて

『飛び出せ!いつもとちょっと違う自分へ!』
～わくわくドキドキ一泊二日の隊員体験～

駒ヶ根青年会議所が、協力隊訓練所のあるまちならではの「国際化のまちづくり事業」の一環として実施している体験入隊は、今年19年目を迎えました。数々の新しい試みを取り入れた中学生体験入隊の様子を、委員長の一様さんに報告していただきました。



社団法人 駒ヶ根青年会議所

いちじょう ひであき

地球市民のまちづくり推進委員会 委員長 一條 英昭さん

当日までの5回の企画会議では、子どもどころ体験入隊に参加した市民の皆さんも実行委員となり、「体験を通じて仲間や周囲の人たちとの人間関係の大切さや、自身の力で日常生活の様々な課題や問題点に対して自発的に行動していく意識を持つきっかけの場となって欲しい」という願いのもと、プログラムを企画しました。

▲バンブーダンスを教してもらいながら交流

参加した中学生は伊南地域で27名、静岡県磐田地域で22名。メインプログラムである「隊員の疑似体験」では、コンゴやメキシコ、ネパール、ベトナムなど11カ国の「派遣国」に分かれて隊員の任務を行いました。任務に向けて語学や任国の基本的な知識を学び、派遣国の状況を知る中で徐々に中学生の目付きも変わり、一生懸命に学んでいる姿が印象的でした。できるだけ本物の体験をさせたいというスタッフの思いから在住の外国人の方々にも御協力をいただき、現地の言葉や文化を学ぶ機会も得て、世界を身近に感じたのではないかと思います。

2日間の日程で、語学学習の他に、「地球のステージ」や「異文化料理体験」「任国調査」、そして自分たちが調査した任国の魅力を成果として発表し任務を終える形となりました。

子ども達の感想には、「初めは仲の良い友達とばかり話していたが、自分から積極的に話しかけることで多くの仲間ができてうれしかった」といった感想や、「仲間と協力し合うことで難しいと思えることでも自分たちで達成できるんだな」という感想などがあり、多くの学びのあった体験入隊になったようです。

協力隊訓練所があるからこそできた今回の体験入隊ですが、このような環境を生かした事業を浸透させ、子ども達に世界をもっと身近に感じてもらえる地域づくり環境づくりが大切ではないかと改めて感じました。

ご協力いただいた皆さんに感謝申し上げます。



▲任国事情を調査してまとめました

元気に やっとなるけ?

所外活動先より
隊員へのメッセージ

山本尚司さんのお宅では、昭和60年から受け入れを行っていて、受け入れた人数は延べ350人にもものぼります。長い間、多くの候補者を見守ってきてくださった山本さんにお話を伺いました。

やまもと ひさし
山本 尚司さん宅

2年前にご主人が倒れてからは、照美さんが一人で農業を引き継ぎ、さらに候補者の受け入れをして下さっています。そんな照美さんは「候補者は一生懸命手伝ってくれる。皆と一緒に作業をしたり、お茶の時間を過ごすことが楽しい」と話していました。

私たちが訪問した日は、6人の候補者と楽しそうに青空の下、稲の苗床作りをしていました。暖かい日差しに連れて田んぼの土手にシマヘビが出てくるハプニングもありました。

山本さんのところで活動した候補者には、ノートにメッセージや連絡先を書いてもらっていて、今はもう3冊目になったそうです。照美さんはそのノートを見返しなが、海外に行った候補者がそろそろ帰ってくる時期を確認し、思いをめぐらせています。

照美さんから最後に「元気にやっとなるけ?海外から帰ってきたら会いに来てください。ノートを見ながら心待ちにしています」とメッセージをいただきました。



▲左から3番目が山本照美さん

ボランティア 奮闘レポート

report_38

ラオス

村落開発普及員（上伊那郡辰野町）

青年海外協力隊

よし え ゆうすけ

吉江 勇介さん

東南アジアの中心に位置し、大きさは日本の本州と同じぐらい。地理上では熱帯だけど12月から1月は息が白くなるぐらい寒くなる。600万人の人口には、48もの部族がそれぞれ独特の生活を営んでいる… そんなラオスで生活を始めてもう1年6ヶ月が過ぎようとしています。

私の任地のボケオ県はラオス北西部にあり、メコン川の対岸をタイとミャンマーに接しています。それほど高くはないのですが周りじゅうが山で囲まれており、赴任初日に「私の街に似てる！」と思い、親しみが持てました。

私の活動は、村民グループを作ったの一村一品活動、平たく言えば商品開発と販売指導です。村民と共に、農作物だけでなく「製品」を開発して村の中の経済を活性化させよう！と日々活動しています。電気がなく、水道も十分でなく、設備を整える事も難しい中での商品開発はとても難しく、時には私が提案した一村一品計画が失敗する事もあったのですが、村民グループのメンバー達に協力してもらったり、助けてもらったりして、何とか新しい商品を開発して市場に出そう！と頑張っています。

毎日の生活がゆっくりと流れていくラオスでの生活はとても快適で、任期の残り半年が短く感じられますが、帰国の時に「あれをやっておけばよかった」と言う後悔がないように、1日1日を一生懸命活動していきます！



▲活動対象村で村民グループメンバーたちと（吉江さん：最後方）



ラオス

ミクロネシア

report_39

ミクロネシア

臨床検査技師（千曲市）

青年海外協力隊

にらさわ くみこ

葦澤 久美子さん

太平洋にポツポツ散らばった小さな島々から成るミクロネシア連邦国のポンペイ州、州立病院に派遣されて早一年半。立派な南国人に成るべく今日も目覚まし時計無しで目覚めております。と言うより隣家の豚の「ご飯の時間！」の興奮声でいやでも目が覚めるのです。そんなのに鳴いても餌増えないのに…

長野県から離れて暮らしたことの無い私が、いきなり南国ミクロネシア。不安は多々ありましたが今となっては全てが「案ずるより産むが易し」です。自分の、人間の適応能力の意外な底力を見せ付けられております。お腹が空けばパサパサ冷や飯+ツナ缶も五ツ星。手動ではない水洗トイレなら、かなり裕福家庭。シャワーとは上の方から出る、打たせ水のこと。寝ている間に蟻が顔を這っても夢うつつにつまんでつぶしたり。ホームステイにより自分の気付かなかった引き出しがどんどん開きました。さすがに丸焼き犬の首から上が苦悶の表情で台所にあつた時にはかなりびくっとし、勧められるまま足にかぶりつきましたが「これを美味しい、と思うポンペイ人が分からない」と理解不能なところも。マツタケを珍重する日本人と同じようなものかな、と納得してみたり。

そんなこんな南国生活ですが、メインは活動ですから楽しいことばかりではありません。日本では有り得ないようなことが起こり、怒りを通り越して脱力することもしばしば。そんなカリカリしていた私に検査室長からの「これはポンペイ文化だから」の一言。これで目から鱗。すんなり納得できました。全ては異文化体験のために来たのですから、ここを楽しまない。との思いで今日も検査室へ参ります。さて、今日は何が起こるやら。毎日が要チェックです。



▲ホームステイ先の家族とサカオ飲み会（葦澤さん：左端）

ラオス人民民主共和国

面積：24万 km²

人口：580万人（2006年世銀統計）

首都：ビエンチャン

住民：低地ラオ族（60%）他、計49民族

言語：ラオス語

宗教：仏教

（外務省HP：各国・地域情勢より）

ミクロネシア連邦

面積：700 km²（奄美大島とほぼ同じ（世銀））

人口：108,000人（2006年、ミクロネシア連邦統計局）

首都：バリキール（1989年11月、コロニアより遷都）

住民：ミクロネシア系

言語：英語及び原地の8言語

宗教：キリスト教（プロテスタント及びカトリック）

（外務省HP：各国・地域情勢より）

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計11名が6月下旬に、それぞれの任国へ出発しました。
(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



あきた るい
秋田 ミラさん
(ケニア/理数科教師/駒ヶ根市)

ケニアで理科を教える予定です。新卒で、社会経験も無い世間知らずなので、ケニアの人々に迷惑をかけぬよう気を付けて二年間暮らしたいと思っています。ケニアの人々、野生動物、自然を毎日拝み、自分の存在の小ささを再確認しに行きます。



しんどう くみ
進藤 久美さん
(バヌアツ/音楽/長野県職員現職参加/山梨県出身)

南太平洋に浮かぶ島国「バヌアツ」で、音楽教育普及のため活動してきます。笑顔の素敵なお子様達と共に学べるのが今から楽しみです。♪音楽 は世界共通の言語♪お互いの気持ちが通じるといいなあ。



いちの さとみ
市野 紗登美さん
(マダガスカル/村落開発普及員/長野市)

10年前の長野五輪の開会式に「雪ん子」として出演させていただきました。平和や国際問題を考えるきっかけとなり、今回の協力隊参加を決意しました。「明日の世界を作るのは子どもたち」という長野五輪での経験を胸に、子どもたちが健康に笑顔で暮らせる世界を目指し、マダガスカルの子どもたちと一緒に笑顔一つずつ増やしていけたら、と思っています。



たけだ あつき
武田 敦岐さん
(サモア/環境教育/長野市)

海の無い長野県から、南太平洋のサモアに行く予定です。環境教育の教材・広報媒体の製作等の活動を行います。サモアの人々と多くの事にチャレンジしたいです。また、参加を応援してくれる家族に心から感謝しています。



きはら ちか
桐原 千佳さん
(ナミビア/美術/上伊那郡辰野町)

アフリカの南にあるナミビアに、美術を教えに行きます。世界で話されている言葉は国によって異なりますが、絵を描く楽しさやものを創る喜びは世界共通なのではないかと思えます。アートのおかげで世界がHAPPYになるような活動をしたいです。



なかつか ようすけ
中塚 洋介さん
(パラグアイ/小学校教諭/下伊那郡高森町)

「自分ができる国際協力が何だろうか」と考え、JICAが開催する説明会に行った事が参加のきっかけになりました。小学校教諭(体育)として活動しますが、「体育の必要性って何だろうか?」「体育の楽しさって何だろうか?」といったことを現地の人々と共に考え、よりよい体育教育を作り上げていけたらと思います。



くらい としえ
倉井 利苗さん
(ラオス/看護師/長野市)

ラオスの首都ビエンチャンから南に600km。サワンナケート県病院に派遣され、人材育成、看護・医療サービスの向上に関わる予定です。今までの環境とは全く違う中ですが、自分にできることを自分にできる方法で行っていききたいと思っています。



なりた あやこ
成田 彩子さん
(ウズベキスタン/看護師/上田市)

ウズベキスタンのジザク州にある小児病院で、看護師として活動します。現地のスタッフといっしょに、記録や業務の見直しを行いながら、看護の質の向上を目指します。おいしいウズベク料理の誘惑に負けず、体重管理もがんばります。



くろこうち いくえ
黒河内 郁江さん
(ベナン/村落開発普及員/飯田市)

「為せば成る。為さねば成らぬ。何事も。成らぬは人の為さぬなりけり」。この言葉を胸に遠いアフリカの地ベナンでも明るく元気に頑張ります。目標は自分自身の成長です。いろんなものを肌で感じて、たくさん吸収して帰ってきたいと思っています。



おはら ゆうこ
小原 裕子さん
(セントビンセント/体育/松本市)

セントビンセントの中学校・高校で体育教諭として活動します。セントビンセントは日本ではあまり知られていませんが、カリブ海の東の端にある、自然がとても美しい国です。一日も早く任国に到着し、現地の方たちと協力して体育教育・スポーツ活動の普及に助力したいと思っています。

【シニア海外ボランティア】



わかばやし のぶ お
若林 伸夫さん
(ネパール/農業機械/長野市)

日本の食糧事情は危篤状態にあり、局所的な飢えが発生している。世界規模では食料の絶対量が不足して久しい。今、日本は食糧・農業問題を根底から見直し、緊急対策が必要だ。ネパールに山間地農業を教わりに行く。空腹は悲しく耐え難いものだ。

次回の訓練予定

平成20年度第2次隊 派遣前訓練日程
平成20年7月9日(水)～9月11日(木)

「訓練所の日」No.15 ～任国事情講座～

「これから自分の行く国は一体どんなところなのだろう?」候補者の不安を和らげてくれるのが本講座。この日は、帰国後問もない先輩ボランティアを訓練所に迎え、それぞれの任国について語ってもらいます。中には「10日前に帰ってきたばかり」というスーツケースを持ったままの人。そんな彼らが語るのにはガイドブックに載っていないことばかり。実感のこもった生の声は赴任を心待ちにしている候補者の胸に深く響きます。

講師の帰国ボランティアはこの駒ヶ根訓練所で訓練を送ってきたかつての候補者。多くの経験を重ねて一回りも二回り

も大きくなった彼らを迎える語学講師や訓練所スタッフの喜びもひとしおです。こうして里帰りを果たし、後輩たちに自らの経験を伝えた彼らは、また新たな人生を歩み始めます。



JULY

7月

9日(水)

平成20年度第2次隊派遣前訓練開始(9/11までの65日間) (駒ヶ根訓練所)

15日(火) 13:00-14:50

公開講座「ボランティア事業の理念」(講師:大塚正明事務局長/青年海外協力隊事務局)

17日(木) 15:10-17:00

公開講座「技術と開発のかたち」(講師:中村尚司氏/龍谷大学経済学部教授)

18日(金) 13:00-13:50

公開講座「JICA事業概要」
(講師:磯貝季典 次長/青年海外協力隊事務局(アジア・大洋州・中南米担当))

25日(金) 15:10-17:00

公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師:廣野良吉氏/成蹊大学名誉教授)

AUGUST

8月

2日(土) 15:10-17:00

公開講座「異文化の理解と適応」(講師:木村秀雄氏/東京大学大学院総合文化研究科教授)

10日(日)

ブラジル日本移民100周年記念長野フェスティバル(長野市)

12日(火) 19:00-21:00

公開講座「地球のステージ」(講師:桑山紀彦氏/地球のステージ事務局理事)

15日(金) 15:10-17:00

公開講座「ニッポンの知恵から学ぶ~日本の開発経験~」
(講師:水野正己氏/日本大学大学院教授)

SEPTEMBER

9月

11日(木)

平成20年度第2次隊派遣前訓練終了(駒ヶ根訓練所)

◆ 公開講座の聴講を希望される方は、2日前までに駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・公開講座担当まで、ご連絡ください。
なお、講師の都合で日程が変更となる場合もありますことを予めご了承ください。

編集後記

これまでの長野県出身JICAボランティアの合計は730名です。これほど多くの方がJICAボランティア活動を通じて、大切な友人を海の向こうに持っているということ。国際協力は「すごい人」がすることではなく、隣人の誰かがしていることになりつつあります。「国際協力を日本の文化に」と緒方貞子理事長が述べていますが、長野県でも、そんな日が近づいている気がします。

お知らせ

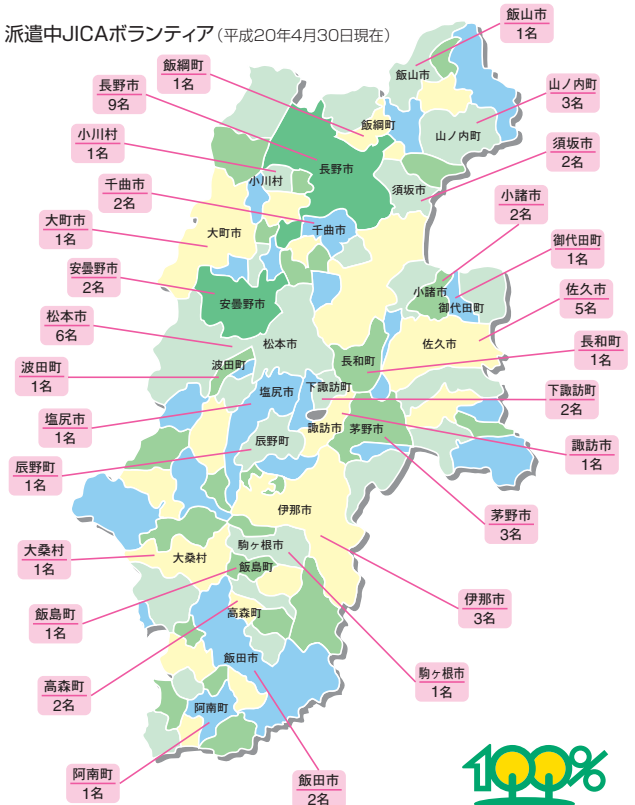
JICAギャラリー特別展示「人々の未来を作る道」

- 日時:2008年5月29日(木)~7月18日(金)
10:00~17:30 *日曜日を除く
- 場所:駒ヶ根青年海外協力隊訓練所JICAギャラリー
- 内容:生活道路などインフラを整備するということは、人々の生活を便利に・豊かにし、国や地域の経済を成長させるだけでなく、人々に新しい活動の機会を与え、人々が持っている力を引き出すこととなります。道や橋が整備されると、人々の生活はどんな風にかわるのか、その影響をテーマにした展示です。期間限定の展示ですので、この機会にぜひ訓練までお越しください。
*なお、来所希望の方は、前日までに訓練所へご連絡ください。

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア!

JICAボランティア派遣実績		平成20年4月30日現在	
青年海外協力隊員数		日系社会青年ボランティア数	
派遣中 54名(内女性36名)		派遣中 2名(内女性2名)	
帰国 627名(内女性273名)		帰国 13名(内女性7名)	
累計 681名(内女性309名)		累計 15名(内女性9名)	
シニア海外ボランティア数		日系社会シニアボランティア数	
派遣中 2名(内女性0名)		派遣中 0名(内女性0名)	
帰国 30名(内女性6名)		帰国 2名(内女性0名)	
累計 32名(内女性6名)		累計 2名(内女性0名)	

派遣中JICAボランティア(平成20年4月30日現在)



100%
古紙100%再生紙

信州発 国際協力

独立行政法人 国際協力機構
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂15
TEL.0265-82-6151(代)/FAX.0265-82-5336
E-mail/jicakjv@jica.go.jp
http://www.jica.go.jp/komagane/index.html

